

念ずれば花ひらく  
念ずれば  
花ひらく  
苦しいとき  
母がいつも口にしていた  
このことばを  
わたしもいつのころからか  
とみえるよふとまた  
そらうしてそのたび  
わたしは花が  
ふしぎと  
いとついでに  
いらいてはた

詩墨作品「念ずれば花ひらく」

# 坂村真民詩墨展

会期

令和元年9月7日(土)~9月21日(土)

午前9時~午後6時30分(入館は午後6時まで) / 月曜休館(9月16日は休日のため開館)

場所

坂の上の雲ミュージアム2階ホール

観覧  
無料



坂村 真民

坂の上の雲ミュージアムで坂村真民記念館の出張展示をおこないます。

記念館以外では初展示となる作品を含め、坂村真民の代表的な「詩墨作品」16点を展示します。  
特に、詩人本人が書いた「直筆の書」は、詩を読み、詩を見る人に、圧倒的な存在感を示しています。

「坂村真民の詩」は、悲しみをともに悲しみ、困難を乗り越え、  
前に向かって生きる人へ「生きることの大切さ」と「生きる力」を与えてくれます。



坂村真民記念館

今回の展示では、作品に加えて坂村真民の生涯を紹介するパネルや家族の写真、坂村真民記念館の紹介パネルも展示し、坂村真民という詩人の全体像を、分かりやすく展示しています。多くの方々のご来館をお待ちしております。



詩墨作品「風のように」

## 坂村 真民 (さかむら しんみん)

1909(明治42)年、熊本県玉名郡府本村(現・荒尾市)生まれ。本名、昂(たかし)。八歳の時、父親が急逝しどん底の生活の中、母を支えた。神宮皇學館(現・皇學館大学)卒業後、熊本で教員となり、その後、朝鮮に渡って師範学校の教師に。終戦後、愛媛県に移住し、高校の国語教師を勤めながら詩作に励む。58歳の時砥部町に定住し、退職後は詩作に専念。2006(平成18)年、97歳で永眠。一遍上人を敬愛し、「タンポポ堂」と称する居を構え、毎日午前零時に起床。夜明けに重信川のほとりで地球に祈りを捧げるのが日課であった。飾らない素朴な言葉で人生を歌い続け、その詩の数々は、多くの人に優しさや勇気、そして希望を与え続けている。さらに、慈しみの心にあふれた人柄や生き方は、老若男女幅広い層から支持されている。



左:詩墨作品「すべては光る」 右上:詩墨作品「せいーばい」 右下:詩墨作品「両手の世界」

## 「坂村真民という生き方」

無料

講師 坂村真民記念館 西澤 孝一 館長

日時 令和元年 9月 7日(土) 午前11時~午前12時

場所 坂の上の雲ミュージアム2階ホール

※申込不要(先着順/当日受付け/50名)

記念講演

### 西澤 孝一(にしざわ こういち)

愛媛県庁職員として、主に人事、福祉、公営企業、企画部門で課長、局長、部長を歴任。定年退職後は、学芸員の資格を取得し、坂村真民記念館の館長として、記念館の運営全般、企画展の展示構成や解説を担当している。

また、真民の生き方、真民詩の魅力についてわかりやすく講演し、一人でも多くの人に坂村真民を知ってもらい、来館してもらうための活動を精力的に行っている。坂村真民との関係については、真民の三女と結婚したことから、真民の晩年約10年間を家族の一員として過ごし、特に最後の3年間は同居して、妻とともに最後を看取る。

